

平成 27 年度 北九州市発達障害者支援モデル事業報告書

青年期ワークショップ

I. 事業要旨

このプログラムは、北九州市発達障害者支援センターに継続相談をしている青年期の相談者の中で、学校での対人関係に悩み、将来への不安が強く自信を失っている方を対象に、同じ悩みを持つ同年代の当事者同士が集まる少人数での活動を行うことによって、自己や他者の視点を理解したり、ソーシャルスキルやコミュニケーションスキルの向上の一助とすることを目的としている。

昨年度より実施しているプログラムであり、今年度も夏季休暇中を利用して、4回シリーズで活動を行った。参加者は、高校生は6名、大学生・専門学生は2名の計8名であった。今年度は、活動の導入時にアイスブレイクやゲーム活動を実施し、その後ロールプレイの話し合いを行うようにスケジュールを組み立てた。

効果検証に関しては、プログラム開始前と終了後に、ソーシャルスキルチェックリストと自尊感情尺度の自己評価を行い、参加者の変化の測定を行った。また、毎回の活動ごとの参加者の様子を記録し、活動中の変化を見た。また、プログラム終了後に、参加者全員および8名の保護者に対し、インタビュー調査とアンケート調査を実施し、家庭や学校での参加者の変化を聞き取った。

ソーシャルスキルチェックリストについては、参加者全員が初期チェックよりも最終チェックの方が、評価点が上がっていた。自尊感情尺度については、4名の参加者が、最終チェックの評価点が上がっていた。活動中は、参加者同士で気遣い合うなどの様子が見られ、コミュニケーションや社会スキルの面で効果が見られた参加者がいた。一方で、全体的に自分のペースで行動したり社会的な振る舞いに課題のある参加者も多く、メンバーだけの関わりのみでは、自分達の言動を振り返っていくことが難しい様子が見られた。今後も参加者が自己モニタリングできるようなプログラム内容の検討を行い、個別の面談を通して個人目標の確認と活動の振り返りを丁寧に行うことが必要である。プログラム実施後のインタビュー調査からは、殆どの参加者がワークショップに「また参加したい」と答えており、活動への満足度は高かった。ワークショップが参加者にとって「同年代の仲間と安心して過ごせる楽しい場所」になっていると考える。また、今年度は、青年期の社会人先輩との座談会を企画した。参加者からは「自分も自立したいと思った」というコメントがあり、将来について前向きに考えられるようになっていた。保護者アンケートの結果については、ワークショップへの参加が本人にとって何らかの有効性があったと感じている保護者が75%いた。多くの保護者は、自立への心配をあげており、進学や就職の情報を得る場としても活動の継続を希

望する意見が多かった。今後も関係機関と連携しながら、参加者が前向きに将来へのイメージを持てるような活動を企画し、楽しんで継続的に参加できるよう配慮しながら、世代に応じた活動内容を考慮して実施していきたい。

II. 事業目的

青年期の発達障害者は、その障害特性から、所属集団での人間関係に困難を抱えていたり、周囲との違いを否定的に捉え、自尊感情が低下し劣等感が高まることも少なくない。北九州市発達障害者支援センターの青年期の相談者の中にも、学校での対人対応に悩み、将来への不安が強く自信を失っている方がいる。そこで、同じ悩みを持つ同年代の当事者同士が集まり、少人数での活動を通して、自己や他者の視点を理解したり、ソーシャルスキルやコミュニケーションスキルの向上の一助とすることを目的とする。

III. 事業の実施内容

ワークショップは、夏季休暇中の午後 2 時から 3 時半までの時間帯に、4 回シリーズで活動を実施した。参加者は、高校生が 6 名、大学生・専門学生が 2 名の計 8 名であった。活動の進行については、北九州市発達障害者支援センターの職員が行ったが、3 回目の「仕事発見！基礎講座」の講話は、昨年度同様に北九州若者サポートステーションの職員に講師を依頼した。社会人先輩との座談会では、北九州市発達障害者支援センターに相談歴のある成人の当事者に依頼し、経験を話してもらった。

活動内容の詳細と参加人数を、表 1 に示す。

表 1 活動内容と参加人数について

日程	活動の内容	参加人数
7月 22日(水)	アイスブレイク・ゲーム・ロールプレイ、茶話会	高校生 4 人
7月 29日(水)	アイスブレイク・ゲーム・ロールプレイ、茶話会	高校生 4 人
8月 5日(水)	アイスブレイク・調理活動	高校生 5 人 専門学生 1 人
8月 19日(水)	「仕事発見！基礎講座」講話・社会人先輩との座談会	高校生 6 人 大学生 1 人

効果検証に関しては、プログラム実施前と終了後にソーシャルスキルチェックリスト（資料 3-2）と自尊感情尺度シート（資料 3-3）を参加者につけてもらい、参加者の変化を測定した。毎回の活動ごとに参加者の様子を記録し、状態の変化を見た。プログラム終了後には、参加者にインタビュー調査（資料 3-4）を行った。保護者にはアンケート調査（資料 3-5）を実施し、家庭での参加者の様子の変化を聞き取った。

その他の取り組みとして、北九州市引きこもり地域支援センター「すてっぷ」と連携し、平成 27 年 7 月 14 日（火）に情報交換会を実施し、平成 27 年 8 月 27 日（木）に、北九州市引きこもり地域支援センター「すてっぷ」で行ってい

るフリースペースの見学を行った。引きこもり地域支援センターの職員からは、活動内容や今後の連携の在り方などについての助言をもらった。

IV. 分析

1. 調査結果

① ソーシャルスキルチェックリスト

青年期ワークショップ参加者に対して、プログラム開始前と終了後にソーシャルスキルチェックリストの自己評価を実施した。

自己評価の結果を、表 2 に示す。

表 2 ソーシャルスキルチェックリスト：自己評価得点

		Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん	Fさん	Gさん	Hさん
I 集 団 行 動	対人マナー	8点	9点	11点	10点	10点	10点	7点	11点
		7点↓	8点↓	13点↑	10点	11点↑	14点↑	7点	11点
	状況理解・心の理論	6点	6点	7点	9点	7点	13点	6点	12点
		7点↑	8点↑	9点↑	7点↓	10点↑	15点↑	6点	12点
	セルフコントロール	4点	6点	6点	6点	7点	9点	3点	5点
		4点	8点↑	7点↑	9点↑	9点↑	11点↑	3点	7点↑
課題遂行	6点	8点	11点	7点	6点	9点	1点	7点	
	6点	6点↓	11点	7点	9点↑	15点↑	1点	11点↑	
II 仲 間 関 係 ス キ ル	仲間関係の開始	1点	3点	2点	3点	4点	6点	6点	7点
		0点↓	5点↑	2点	2点↓	4点	6点	9点↑	7点
	仲間関係の維持	5点	4点	2点	10点	10点	12点	10点	16点
		5点	8点↑	5点↑	11点↑	12点↑	12点	12点↑	16点
	仲間への援助	1点	3点	2点	3点	6点	7点	1点	8点
		1点	4点↑	4点↑	5点↑	6点	9点↑	1点	9点↑
III コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン ス キ ル	聞く・話す	3点	3点	2点	5点	4点	3点	2点	2点
		3点	2点↓	3点↑	5点	4点	3点	2点	4点↑
	非言語的スキル	0点	4点	1点	5点	4点	9点	5点	10点
		0点	4点	3点↑	6点↑	5点↑	9点	5点	6点↓
	アサーション	6点	13点	3点	7点	12点	23点	16点	14点
		8点↑	15点↑	4点↑	10点↑	16点↑	24点↑	16点	18点↑
話し合い	3点	1点	2点	6点	3点	6点	0点	5点	
	3点	0点↓	4点↑	6点	4点↑	7点↑	3点↑	5点	
合計		43点	60点	49点	71点	73点	107点	57点	97点
		44点↑	66点↑	65点↑	78点↑	90点↑	125点↑	65点↑	106点↑

ソーシャルスキルチェックリストは、各項目「0~20%達成」で0点、「21~50%達成」で1点、「51~80%達成」で2点、「81~100%達成」で3点とし、自己評価を行った。各項目、プログラム実施前の得点を上段、終了後の得点を下段に示し、下段の中で評価点が上がった項目を四角、評価点が下がった項目を太字で示す。

ソーシャルスキルチェックリストの自己評価は、領域や項目によって点数が異なったが、参加者全員が、初期チェックよりもプログラム終了後の最終チェックの方が合計評価点が上がっている。評価が上がった項目は個人によって異なるが、Ⅰ集団行動の【セルフコントロール】が良くなっている参加者が6名、Ⅲコミュニケーションスキルの【アサーション】が良くなっている参加者が7名いる。

② 自尊感情尺度シート

青年期ワークショップ参加者に対して、プログラム開始前と終了後に自尊感情尺度シートの自己評価を実施した。

自己評価の結果について、図1に示す。

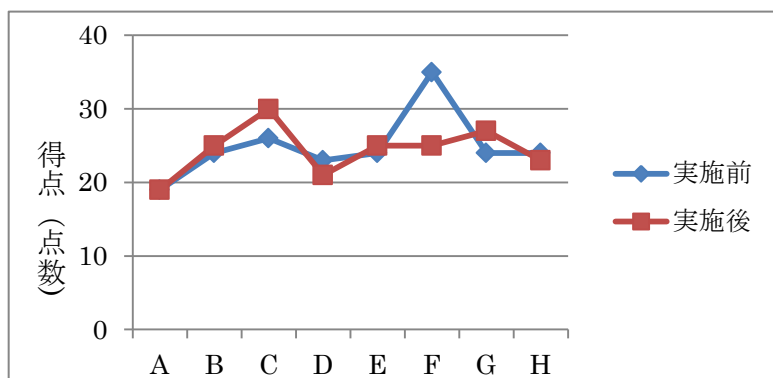


図1 自尊感情尺度：自己評価得点

自尊感情尺度シートは、各項目を4段階評定で点数化し、「強くそう思わない」で1点、「そう思わない」で2点、「そう思う」で3点、「強くそう思う」で4点とした。図1の縦軸は、参加者の自己評価得点を示す。

自尊感情尺度シートにおいても、個人によって自己評価の差が見られた。参加者8名中4名の方が、最終チェックの評価点が上がっている。評価点が下がった3名の方に関しては、「学校の友達関係でちょっとでもトラブルになると、前向きに考えられなくなる」というコメントもあり、チェック時の学校や家庭での出来事が点数に影響していることが考えられる。

③ ワークショップ活動参加時の様子の変化

表3は、ワークショップ参加者の活動記録から、個人の特記事項をまとめ

たものである。

表 3 ワークショップ参加者の活動記録

A	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム活動のチーム戦の話し合いでは、メンバーの話を聞いていない。 ・ロールプレイは、スタッフが実演を試みるか聞くと、「嫌です」と断る。 ・茶話会は、自分からメンバーに話しかけることはないが、話しかけられると答える。 ・調理は、スタッフの指示に応じながら作業することが多い。メンバーの分の飲み物を注ぎ分ける。 ・講話は、スライドに注目しよく聞いている。 ・先輩との座談会は、先輩の話をよく聞いている。
B	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム活動は、メンバーにアドバイスしたり、話し合いで困ると、自ら「ヘルプ」とスタッフに援助を求める。 ・ロールプレイは、スタッフが実演を促すと、「じゃあやります」と引き受ける。 ・茶話会は、メンバーを気遣い、お菓子をメンバーの近くに置く。 ・調理は、活動前にスタッフの準備を手伝う。作業は、指示書を見ながら行う。材料や道具を借りる時は、メンバーに「いい？」と確認する。 ・講話は、途中から下を向いて、手遊びをする。
C	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム活動は、メンバーと話し合うことはない。 ・ロールプレイは、メンバーの意見に頷いたり挙手して同意する。 ・茶話会は、趣味や部活の話を聞かれると答える。メンバーやスタッフの話を聞いて笑う。 ・調理は、周囲を見ながら作業することが多い。 ・講話は、下を向いて寝ていることが多いが、興味のあるスライドになると注目する。 ・先輩との座談会は、話をよく聞いている。
D	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム活動は、メンバーにルールについて教えたり、スタッフの声かけに素早く反応しながら参加する。 ・ロールプレイは、聞かれると自分の意見を発表する。スタッフが促すと、実演する。 ・茶話会は、自分からメンバーに話しかけるが、メンバー同士では会話が続かない。 ・調理は、ペアのメンバーと作業分担したり、メニューを提案し合いながら作業する。 ・講話は、スライドに注目をしてよく聞いている。 ・先輩との座談会は、先輩の話を聞いて笑ったり、よく注目している。
E	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム活動は、メンバーの様子を見て、ヒントを出したりアドバイスする。 ・ロールプレイは、スタッフから聞かれると積極的に自分の意見を発表する。 ・茶話会は、趣味の話で盛り上がるが、話が詳しすぎたり、話し出すと止まらなくなる。 ・調理は、ペアのメンバーと話しながら作業する。 ・講話は、下を向いて寝ているが、興味のあるスライドの時は、注目して聞いている。 ・先輩との座談会は、よく話を聞いている。先輩に仕事の選択のことについて質問する。
F	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフから声をかけられると、「こんにちは」と返事をする。 ・講話開始前にトイレに行き、講話が始まってから部屋に戻る。 ・講話は、スライドによく注目している。休憩時間中は、退室し待機している母親の近くで過ごす。

	・先輩との座談会は、先輩に注目し話をよく聞いている。
G	・ゲーム活動は、中心になって積極的にメンバーと話をする。 ・調理は、「指先を包丁で切ったことがある」と言い、切る作業をペアのメンバーに「よろしくお願ひ」と頼む。メンバー全員にコップを配る。
H	・講話は、手元の資料やスライドを見ながら講師の話を聞いている。休憩時間中は、スマートフォンを扱っている。スタッフが声をかけると、飲み物を取りに行く。 ・先輩との座談会は、話をよく聞いている。

個人によって内容は異なるが、ワークショップの活動に参加する中で参加者に変化が見られている。ゲーム活動では、メンバー同士で話し合ったりアドバイスしながら活動を進めたり、話し合い中に困ると、職員に援助要請する参加者もいた。ロールプレイでは、シナリオ資料を見ながら自分の意見を発表したり、メンバーの意見に対して、頷いたり挙手するなど肯定的な態度を示す参加者が5名いた。茶話会では、職員やメンバーと共通の趣味の話をして過ごす様子が多く見られ、メンバーにもお菓子を取り分けたり、ジュースを配るなど、周りを気遣う行動をするようになった参加者が4名いた。調理活動では、話し合い活動ではなかなか会話に参加できなかった参加者が積極的に行動していた。自分の苦手な作業については、「よろしくお願ひ」とメンバーに代行を依頼するなど、メンバー同士で役割分担しながら作業をしていた。

活動を通して参加者全員にコミュニケーションや社会スキルの面で何らかの変化が見られたが、全体的には、自分のペースで行動したり、社会的なマナーが分かっておらず振る舞いに課題のある参加も多く、自分の言動を振り返ったり、他者の視点に気づくことが難しい様子も見られた。自己モニタリングが難しい参加者には、今後も個別面談を通して目標の確認や活動の振り返りを丁寧に行う必要がある。また、メンバー間だけでは会話が開始されなかったり、関わりが展開できにくい場面もあったため、今後も活動に職員が介入しながら、座席の配置やグルーピングを考慮してメンバーの関わりを拡げていくような配慮が必要であると考えられる。

④ ワークショップ参加者へのインタビュー調査

インタビュー項目は、「1. また参加したい活動は何ですか?」「2. ロールプレイ活動に参加して、日常生活の中で参考にしたことはありますか?」「3. 今後、どのような調理活動を希望しますか?」「4. 講話や座談会に参加して、日常生活の中で参考にしたことはありますか?」「5. 座談会について、意見があれば教えてください」「6. 今後、どのような講話を希望しますか?」「7. ワークショップに参加して、他のメンバーとの交流はできましたか?」「8. 今後、青年期ワークショップへの参加を希望しますか?」の8項目である。

参加者全員に対し実施した。インタビュー調査の結果から、殆どの参加者がワークショップの活動に「また参加したい」（7名）と答えており、活動への満足度は概ね高かった。「次年度の参加は、分からない」と答えた参加者は、今年度ワークショップ唯一の女性の参加者であったため、「次年度は、女子のメンバーがいれば、趣味の話とかをしたい」というワークショップの継続参加の希望はあがっていた。

ゲーム活動や茶話会については、「仲間とコミュニケーションを取れる機会があつて良かった」、「メンバーと協力し合ったり、会話をすることが楽しかった」という意見があつた。「メンバー全員でできるゲームがしたい」とメンバー同士の交流を求める要望が多かった。

ロールプレイのテーマについては、「あまり参考にならないシチュエーションだった」、「実生活では経験したことがない内容なので参考にならなかった」という意見が複数あがった。参加者からは、「今度は分たちの経験を話し合いたい」という意見も出ており、話し合いの内容を実生活に活用させたいと感じている参加者がいた。

調理活動は、「楽しかった」、「次はお菓子が作りたい」などの意見が複数あがった。メンバー同士の共同作業を通し、「チームワークができた」という意見があり、対人スキルの面で効果が見られた参加者がいた。

講話と社会人先輩との座談会の満足度は全体的に高く、「自分も自立したいと思った」と就労に対する意欲が高まり、参加者が将来について前向きに考え始めるようになっていた。実際に就労している先輩の話聞いて、「できていたとっていたことが、実はできていないんじゃないかと思った」と自己理解に繋がっている参加者もいた。

⑤ 保護者アンケート

ワークショップから半年後に、アンケート送付可能な保護者8名に対し、アンケート調査を実施した。アンケート回収数は8、アンケート回収率は100%であった。

アンケートの結果について、表4、5、6、7と図2に示す。

表4 「本人が、青年期ワークショップに参加することを希望した理由は何ですか（重複回答可）」について

① 同じ趣味や悩みを持つ、同年代の仲間との活動の場所が欲しいから	3
② 家庭や学校以外での場所で、人との関わり方の練習をしたいから	6
③ 少人数での活動を通して、自分自身のことや相手の視点を知る練習をしたいから	3
④ 同年代の仲間とコミュニケーションの練習をしたいから	3
⑤ 社会のマナーを覚えたり、振る舞い方の練習をしたいから	3
⑥ 進学や就職についての情報を知りたいから	3
⑦ 参加を勧められたから	1

表5 「本人が、ワークショップに参加して何か家庭や学校で変化したことがあれば、教えてください」について

・知らない人の中に入ることは苦手だと思っていたが、嫌がることもなく参加できた。
・学校でも少しずつ緘黙状態から抜け、運動会やクラスマッチ等に参加できた。
・以前より少し自信がついたのか自分を卑下する言葉が出なくなった。
・自分の気持ちをきちんと言葉にしようとしているようになっている。
・以前のことを振り返って、「自分が悪かったこともあるけど、親には「あなたは悪くないよ」と言って欲しかった」等、言い表すようになった。

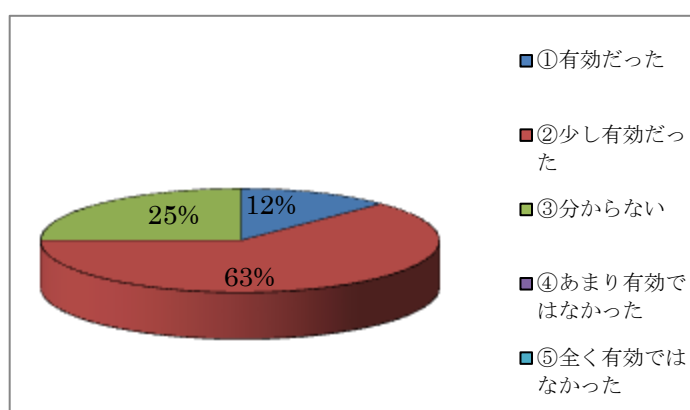


図2 「本人が、ワークショップの活動に参加することは有効でしたか」について

表6 「本人の現在の生活で、どんなことが心配ですか（重複回答可）」について

① 学校での教師や友達との関わり方	4
② 異性との付き合い方	0
③ 家族との関わり方	1
④ 生活面での対応（忘れ物が多い、電話対応が苦手など）	4
⑤ 学習面についての心配（授業についていけない、課題提出ができないなど）	3
⑥ 将来の進路についての不安（どんな就職先があるのか分からないなど）	8
⑦ その他	0

表7 「青年期ワークショップに関する要望などがあれば、教えてください」について

・殻が破れるような思い切った企画をして欲しい。
・キャンプや山登り、川遊びや旅行等の誰かの助けやコミュニケーションが必要になる活動を経験させたい。

・泊まり込みでのワークショップをして欲しい。
・今後も人との関わりで悩みが出たときにこのような場に参加できると良い。
・履歴書の書き方や面接のシュミレーションを行っても良いのではと思う。
・短期でもアルバイトをしたことや始めて面接を受けた話など、就労の一步手前のところからのアドバイスをもらう機会があれば良い。
・自動車免許取得や洋服選びのことなども聞けると、役立つのではないか。
・どんなことでも良いので、将来のことが具体的に見通せるような勉強会があれば参加させたい。

図 2 の「本人がワークショップの活動に参加することは有効でしたか」の主な内容を以下に示す。

- ・明るく希望を持つようになった。
- ・思い切って参加してみたら意外と楽しかったという経験ができたことにより、新しい所や新しい体験を少しずつ恐れなくなってきた。
- ・社会人になった人のお話を聞いて、勉強になったようだ。
- ・変化はあまり感じられない。(2)
- ・同世代の人達と関わることは、少しでも影響があったのだろうと思う。
- ・他の人への興味は薄い、「昨年会った人に今年も会えたよ」と思い出し、話してくれた。
- ・以前より、困ったことをよく話すようになった。親も本人からの相談を深く聞けるようになった。

表 6 の「本人の現在の生活で、どんなことが心配ですか（重複回答可）」の主な内容を以下に示す。

<①学校での教師や友達との関わり方>

- ・相手の気持ちを汲むことが苦手なので、いつも孤立する。
- ・自分に自信がない為、自分から声がかけれない。

<③家族との関わり方>

- ・妹と仲良くできない。「年下のくせに」という気持ちが強く、何か言われるたびに反発する。

<④生活面での対応（忘れ物が多い、電話対応が苦手など）>

- ・将来一人暮らしになったときに、毎日困ったことばかりになるのではないかな。
- ・ずっと家にいる。友達とあまり遊ぶことがない。
- ・時間の概念がない。
- ・人にはルールを守るように言うが、自分は難しい。

<⑤学習についての心配（授業についていけない、課題提出ができないなど）>

- ・今年は受験生だが、自分で進路を考えてみんなと同じように勉強するこ

とができていない。

<⑥将来の進路について不安（どんな就職先があるのか分らないなど）>

- ・学校卒業後に、本人に合う就職先が見つかるのか心配。(3)
- ・障害特性のため（記憶が定着しない、こだわりが強く妥協できない、意味の取り違え、臨機応変ができない）、社会人になって仕事ができるのか心配。(2)
- ・まだ将来の具体的なプランがない。

表4の結果から、「家庭や学校以外での場所で、人との関わり方の練習をしたいから」という回答が最も多く、次いで「同じ趣味や悩みを持つ、同年代の仲間との活動の場所が欲しいから」、「少人数での活動を通して、自分自身のことや相手の視点を知る練習をしたいから」、「同年代の仲間とコミュニケーションの練習をしたいから」、「社会マナーを覚えたり、振る舞い方の練習をしたいから」、「進学や就職についての情報を知りたいから」という回答が多かった。

保護者にとってワークショップは、「学校外の場所で少人数集団でのソーシャルスキルトレーニングの場」としてのニーズが高いことが分かった。

表5の結果からは、ワークショップに参加以降、嫌がっていた行事に参加できるようになったり、参加者が学校でも少しずつ自信をつけて新たな経験に挑戦するようになっていくことが分かった。家族に対しても、自分の気持ちを言葉にして伝えるようになったり、家庭でのコミュニケーションにおいても効果が見られている参加者がいた。

図2の結果から、12%がワークショップへの参加は「有効だった」、63%が「少し有効だった」と回答しており、75%の保護者がワークショップへの参加が本人にとって何らかの有効性があったと感じていることが分かった。「分からない」と回答した2名については、昨年度から継続参加している参加者の保護者であり、「日常での変化はあまり感じられないが、活動は楽しかったようだ」、「他者への関心は薄いのに、メンバーの顔を覚えていたようで、そのことを家で話してくれた」というコメントがあり、実感できる変化には結びつかなかったが、ワークショップが参加者にとって「継続して参加することのできる仲間と過ごす楽しい場所」になっていると考えられる。また、保護者自身の対応が変化したというコメントもあり、家族支援の面でも効果が見られた。

表6の結果から、「将来の進路について不安」という回答が最も多く、保護者は自立についての心配が強いことが分かる。また、「学校での教師や友達との関わり方」や「生活面での対応」の回答も多く、対人対応、時間の管理などに関する具体的な困り感があげられた。

表7のワークショップへの要望に関しては、様々な意見があがっているが、

活動の継続を希望する意見が多かった。

2. 考察

青年期ワークショップは、昨年度から実施しているプログラムであり、今年度も夏季休暇中に4回シリーズで活動を実施した。活動終了後のインタビューでは、参加者全員が「また参加したい」と答えており、「学校以外の場所でメンバーと一緒に色々な活動ができたことが良かった」、「他のメンバーと交流できる時間が楽しい」、「これからもワークショップは役に立ちそう」などの意見が複数出ていた。ワークショップが参加者にとって、同年代の仲間とリラックスして関わることのできる楽しい居場所になっていると考える。

また、学校では、今まで参加しなかった行事活動に参加するようになったり、家族へ自分の気持ちを言葉で表現するようになるなど、活動を通して自分のことを知り、少しずつ自信をつけている参加者もいる。「メンバーと会話を続ける方法を知りたい」、「ロールプレイの時間を増やしても良いと思う」という意見もあり、話し合いの内容を実生活に生かそうとするなど、ワークショップが参加者にとって、ソーシャルスキルトレーニングの実践としても有効な場になることができた。また、ワークショップ終了後には、就職の相談先として若者サポートステーションに登録した参加者もおり、進路の選択肢を広げる支援にも繋がったと考える。

しかし、ロールプレイのテーマ設定や進行の進め方については、課題もあがっている。今年度はシナリオ資料を使用し、選択肢の中から意見を選ぶようにしたが、テーマが実生活では経験したことのない状況だったこともあり、「参考にならなかった」という意見もあった。また、話し合いの際は、テーマや状況を文字や絵にしてホワイトボードに提示し、加えて手元資料を準備するなどの工夫を行ったが、視覚資料が多く、注目するポイントが絞れなかった。今後は、シナリオの状況設定をメンバーに考えてもらう、メンバー同士で意見を出し合ってもらうなど、参加者がイメージしやすいように話し合いの設定を検討したり、進行の際には、参加者が情報を整理できやすいような資料の提示の仕方の工夫が必要である。

また、今年度は、ワークショップが終了して1ヶ月半後にソーシャルスキルチェックと自尊感情尺度の再評価を実施し、インタビューで聞き取りを行ったが、「活動内容を覚えていない」という意見もあった。インタビューについては、記入式にした方が意見が出やすいという要望もあり、今後は参加者の状態を見ながら再評価の実施時期や形態を検討する必要がある。

保護者アンケートの結果からは、自立に関する心配が多くあがっており、保護者からは、進路に関する知識や情報を得るための場所としてもワークショップへの期待は高いと考える。今後もメンバーの様子に応じて関係機関と連携しながら、進路の講話や成人当事者との座談会等を企画し、参加

者が前向きに将来へのイメージを持てるような活動を実施していきたい。